

連作詩の精読——陸游「菴中晨起書觸目」四首の分析を通して——

甲斐 雄一

一、はじめに

南宋の陸游（一一一五～一一二〇）には、「書觸目（目に触るるを書す）」と題した詩が十数篇見られる。一万首近い陸游の作品全体からすれば、この「書觸目」詩はそのごく一部にすぎない。しかし、管見の限り、彼以前には杜甫と王禹偁に先行例が確認されるのみであり、たかが十数篇とはいえ、やはり陸游、ひいては宋詩の何らかの特徴を示すものであると見なすこともできよう。

本稿は陸游「菴中晨起書觸目」四首（『劔南詩稿』卷三十八）という七言律詩の連作に対して精読を試みるものである。本来ならば精読とは何か、ということについても筆者の見解が示されるべきであろうが、正直に言えば、以下に述べられるのは読めない作品との悪戦苦闘の過程である。だが、精読を通してようやくたどり着ける読みの面白さ、この根本を筆者自身が充分に楽しんだことは確かである。以下、一首ごとの読みと四首連作としての読みを提示していきたい。

二、各首の解釈

それぞれの作品の読解に入る前に、作品の繫年について説明しておきたい。この詩は慶元四年（一一九八）の冬に故郷である山陰で作られたものである。この時陸游は七十四歳、淳熙十六年（一一八九）に礼部郎中兼実録院檢討官を弾劾により辞してから、郷里での退隱生活も十年になろうかというところである。

(其一)

山重水複怯朝寒	山重なり水複 <small>かさ</small> なりて朝の寒きに怯へ
一卷窗間袖手看	一卷 窓間 袖手して看る
朱擔長瓶列雲液	朱担の長瓶 雲液を列し
絳囊細字拆龍團	絳囊の細字 龍団 <small>ひょうたん</small> を拆く
數峯移自侏儒國	數峰 侏儒の国 <small>よ</small> 自り移り
一研來從黯淡灘	一研 黯淡の灘 <small>よ</small> 從り來る

要識放翁頑鈍處 放翁の頑鈍なる処を識るを要むれば

胸中七澤著猶寛 胸中 七澤 著おきて猶ほ寛し

〔自注〕

雲液、揚州酒名、近淮帥餉數十尊。營道小山及劍硯、得自張季長・張仲欽、適在案間。

雲液、揚州の酒の名なり、近ごろ淮帥 数十尊を餉る。營道の小山及び劍硯、張季長・張仲欽より得て、適たま案間に在り。

〔拙訳〕

山が重なり川が曲がりくねった（人里離れた）庵にて朝の寒さに怯え、窓辺に広げた二巻の書物を袖に手を入れてながめる。赤い持ち手に下げられた長い瓶には雲液の酒が並び、小さい字が刺繍された赤い袋には龍団の茶が蔵される。二、三の峰（筆置き）が小人の国から移ってきて、硯一つが黯淡の（ほの暗い）灘からやってきた。この放翁の愚かで鈍いことを知りたいのならば、私の胸の中は七沢を並べていつてもまだまだ広々としているのだ。

押韻は上平二十五寒（寒・看・灘）、二十六桓（團・寛）^(三)、寒・桓韻は同用。「庵の中で朝目覚めて」と詩題にあるように、まず首聯では冬の朝に読書する陸游自身が登場する。「山重なり水複なり」という表現は、彼の名作「遊山西村」（『劍南詩稿』卷一）の「山重水複疑無路、柳暗花明又一村（山が重なり川が曲がりくねって路が途絶えたかと思つたら、柳がこんもりと暗く花が鮮やかな先にまた村里があつ

た）」という一聯でよく知られていよう。陸游詩には他に「水複山重客到稀、文房四士獨相依（山が重なり川が曲がりくねって客が尋ねることもめつたになく、文房の四士だけが相従う）」（「閑居無客、所与度日筆硯紙墨而已、戲作長句」、『劍南詩稿』卷二十六）という例があり、この四字は自邸を人里離れた、俗塵とは一線を画したところに置いたために用いられていると言えるだろう。

なお、黄庭堅（「跋郭熙画山水」、『黄庭堅全集』別集卷七）に「郭熙元豊末爲顯聖寺悟道者作十二幅大屏、高二丈餘、山重水複、不以雲物映帶、筆意不乏（郭熙が元豊の末に顯聖寺の僧のために十二幅の大屏を画いた。高さは二丈あまり、山が重なり川が曲がりくねり、雲を用いて際立たせることをせず、なかなか趣深い）」と、北宋の高名な画家・郭熙の山水画を評する用例がある。二首目とも併せて見れば、この語に風景を山水画中のそれとして意識させるイメージを読み取ってもよいだろう。

第二句の「一卷」は未詳。ひとまず「一卷窗間」を窓辺に広げた一巻の書物、と解しておく。あるいはすだれを巻き上げた窓の隙間、もしくは窓の平面を巻物に譬えた表現としても読めるだろうか。

続いて描写は庵の中に置かれた物たちを対象とする。領聯は酒と茶の対で、「雲液」は自注にあるように揚州名産の酒、龍団は団茶である。「朱擔」はひとまず「擔」を物をかつぐ道具と解した。それと対になる「絳囊」は、龍団の茶が入っている赤い袋で、蘇頌「次韻孔学士密雲龍茶」（『蘇魏公文集』卷十二）に「北焙新成圓月様、内廷初啓

絳囊封（北苑で熱して満月の形にしたばかりの団茶、内廷でその赤い袋の封を切る）」とある。生活に密着した細やかな物の詠出は、いかにも宋詩然としている。

頸聯では、陸游の視点は机の上（自注に「案間」とある）をズームアップする。「侏儒國」は自注の「營道（現湖南省道県）」を表現したもので、友人から營道産の山状の筆置き（「小山」）が送られてきたことを、「いくつかの峰が小人の国から移ってきた」と言っているのである。第六句の「黯淡灘」は、福建省南平市の東の地名で、硯の名産地として知られる。これは自注の「劍硯」を指している。ここに、文机の上は山水を備えた小さな、ミニチュアの世界へと変貌する。前の対の「雲」「龍」というスケールの大きな字との対比も鮮やかである。

そして、尾聯において示される陸游の「胸中」は難解である。「七澤」は楚にあつた七つの沼沢で、司馬相如「子虚賦」〔『文選』巻七）に「僕對曰、『唯唯。臣聞楚有七澤、嘗見其一、未睹其餘也。臣之所見、蓋特其小小者耳、名曰雲夢（私は答えていった、「ええ。楚には七つの沼沢があると聞きますが、一つだけ見たことがありますして、その他は未だ目撃しておりません。私が目にしたのは、たぶんその中でも特に小さいのですが、名を雲夢と言います）」とある。

詩においては、「子虚賦」の斉の広大さを誇る場面における「吞若雲夢者八九、於其胸中、曾不薈芥（雲夢沢を八つ九つ呑みこんでも、その胸中に細かいごみが引っかけたようにも感じない）」という表現を踏まえて、人の度量の大きさを讃えるときに用いられること

が多い。かの七沢を並べていっても、我が胸の内はそれに満たされることなく広々としている。一見度量の大きさを自慢する表現にも見えるが、七句目の「頑鈍（愚かで鈍い）」と併せるとどうか。これは敢えて「放翁」と号する陸游の自負を自虐的に語ったものとして解釈できようが、しかしなぜ「七澤」が並べられる胸中は「頑鈍」なのか、疑問が残る。

筆者は、この「頑鈍」を以下のように解釈したい。まず狭く読めば、これはこの詩の組み立てから導かれる自嘲である。「七澤」は表面的には広大な地形の謂いであるが、この詩において「雲」に「龍」が飛ぶのは庵の中であり、山水を備えた世界は机の上に展開される。ならば、「七澤」もまたここまで構築されたミニチュアの世界のもの、と読んではどうだろうか。本来果てしない広大さを表すはずの「七澤」は、居住空間内に完結するちっぽけなものになり下がり、度量の大きいはずの「胸中」も、「頑鈍」そのものとして解することができる。

もう一つ注意したいのは、「七澤」は七つ、つまりたくさんあると言うことである。細かいようだが、「雲夢沢を八つも九つも」という典故の表現は純粹に広さを表す比喩になるだろうが、「七つある沢を並べても」という表現は、広さの他に多さも示しており、両者は微妙な差異を有している。唐宋詩において、「胸中」の風景に自足する、あるいは絵に描かれた風景などが「胸中」のそれと一致する、という表現は散見されるが、「胸中」の風景がたくさんあり、しかもそこに

はまだまだ余裕があるという表現は、自身のとらえどころのない心の内を示しているのではないだろうか。「七澤」に表されるようなとりとめのない陸游の心が、近代的な自我に接近していると評するのは、いささか読み過ぎであらうか。

(其二)

暉暉初日上簾鈎	暉暉たる初日	簾鈎を上り
漠漠清寒透衲裘	漠漠たる清寒	衲裘を透る
雪棘並棲雙鵲暝	雪棘 並びて棲む	双鵲の暝
金環斜絆一猿愁	金環 斜めに絆す	一猿の愁
廉宣臥壑松楠老	廉宣 壑に臥して松楠老い	
王子穿林水石幽	王子 林を穿ちて水石幽なり	
戲事自憐除未盡	事に戯れて自ら憐む	除きて未だ尽きざるを
此生行欲散風漚	此の生 行ゆく風漚を散ぜんと欲す	

〔自注〕

唐希雅畫鵲、易元吉畫猿、廉宣仲老木、王仲信水石、皆菴中所挂小軸。
唐希雅の画鵲、易元吉の画猿、廉宣仲の老木、王仲信の水石、皆菴中挂くる所の小軸なり。

【拙訳】

きらきらと太陽が簾の鈎に輝きながら昇っていき、ぼんやりと薄暗い中、澄んだ寒さがぼろのかわごころもを通り抜ける。雪の枝に

黒い二羽の鵲が眠り、金のリングが猿の愁いを斜めにつなぎとめる。廉宣仲は老いた松や楠が根を張る谷に寝転がり、王仲信は泉や石の奥深い林を抜けて行く。戯れに興じる気持ちが尽きずにあるのを憐れに思いつつ、この人生、ほどなくうたかたが消えゆくとしていく。

押韻は下平十八尤（裘・愁）、十九侯（鈎・漚）、二十幽（幽）、尤・侯・幽韻は同用。首聯では太陽が昇りはじめ、時間の経過が示される。

続く二聯の対句は、自注にあるように絵画をあたかも実景のように詠っている。頷聯はそれぞれ唐希雅（五代南唐）の鵲、易元吉（北宋）の猿を描いた絵画である。頸聯は廉布（字は宣仲）の老木、王廉清（字は仲信）の水石の絵画を詠うが、こちらは絵の作者が陸游と同時代人であり、それゆえ作者さえも句中の主役者として登場しているのが面白い。

尾聯の「戲事」とは絵画を鑑賞すること、あるいはそれを詩歌に詠うことまでを含んでいるだろう。「自憐」とは、それを楽しむ気持ち、馬鹿らしいという思いどころも混在すると捉えたい。この二句は倒置させて、人生が終わろうとしているのにまだそうした事に戯れる気持ちは消えない、と解すれば、其一の「頑鈍」と響き合うであろう。総じて、前半二首からは、自宅で詩を読むしかない自身を自ら嘲りつつも、そこに楽しみを見いだしている陸游の姿を見て取れよう。

(其三)

賦形不使面團團

形を賦することわして面團めんたんたらしめず

聳膊心知到骨寒

聳膊 心を知る骨に到るの寒きを

晏子元非枕鼓士

晏子 元より枕鼓の士に非ず

杜生那有切雲冠

杜生 那なんぞ切雲の冠有らんや

時扶遷客枕榔杖

時に扶す 遷客 枕榔の杖

日厭詩人首蓓盤

日に厭いとふ 詩人 首蓓の盤

頼是平生憎阿堵

頼さいはひに是れ平生阿堵を憎む

今年初解侍祠官

今年 初めて解く 侍祠の官

【拙訳】

天から与えられた外見は丸々と太っておらず、そびえる腕のやせつぼちに寒さが骨身にしみる。晏子はもとより鼓を枕にするような士ではないし、杜生がどうして切雲の冠を持っていようか。時折左遷された客の枕榔の杖をつき、日に日に貧しい詩人のうまごやしが盛られた容器にうんざりする。幸い平素より銭を憎んでいて、今年やつと祠祿の官から免じられた。

押韻は上平二十五寒（寒）、二十六桓（團・冠・盤・官）、寒・桓韻は同用。首聯は自分の体型を嘲つた長孫無忌に対し、歐陽詢が相手の太った体型を揶揄し返した故事に基づく（二二）。ここでは陸游自身の瘦せた姿を言うことで、以降の清貧の強調につながっている。

第三句の「枕鼓士」は、鼓を枕にするほど体躯の大きな士。韓博が王莽に「巨毋霸」という虚構の人物について述べるくだりに「軺車不

能載、三馬不能勝。即日以大車四馬、建虎旗、載霸詣闕。霸臥則枕鼓、以鐵箸食、此皇天所以輔新室也（小型の馬車には載れず、三頭立ての馬でも耐えられません。その日のうちに大きな車を四馬立てで、虎旗を立て、霸を載せて宮城の門まで来ております。霸は寝転べば鼓を枕にし、鉄の箸で食事をします。これは天が新王朝を助けて下さる証にごさいましょう）」とある（二三）。

第四句の「切雲冠」は、雲に接するほどの高い冠で、『楚辞』九章・涉江に「帶長鋏之陸離兮、冠切雲之崔嵬（上下する長剣を帯び、雲に接するほどに高い冠をかぶる）」とある。陸游「贈隱者」詩（二首の其一、『劍南詩稿』卷五十九）に「相逢初未省、但認切雲冠（初め会ったときはよく理解しておらず、ただ雲に接してそびえ立つ冠だけが印象にあった）」とあるように、隠者を象徴する言葉である。

領聯で対になる二人の人物、晏子は晏嬰、杜生は未詳だが、「枕鼓士」が身体の大きさ、「切雲冠」が高さを言うことからして、体格の良くない人物（ここでは即ち陸游自身）を言うのであろう。

次の対句もそれぞれ典故に基づく表現である。「遷客枕榔杖」は、蘇軾「枕榔杖寄張文潛一首、時初聞黃魯直遷黔南、范淳父九疑也」（『蘇軾詩集』卷三十九）に「江邊曳杖枕榔瘦、林下尋苗華撥香（川のほとりで杖ついて枕榔がやせ細り、林に新芽を尋ねて華撥が香る）」とあり、「遷客」とは左遷された蘇軾を直接には指す（二五）。また、「詩人首蓓盤」は、詩人のそまつな草だけの食事で、初唐の薛令之が、東宮付きの官僚が冷遇されていたことを嘆いて役所に書きつけた詩を踏まえる（二六）。頸

聯では持ち物も食事も粗末な、「遷客」「詩人」に比される陸游の貧しさが見られる。

第七句「阿堵」は六朝の口語で「これ、この」の意。王衍が銭のことを「阿堵物」と呼んだ故事から、お金のことを指す（『世説新語』規箴篇）。

同年秋の作「病雁」（『劍南詩稿』卷三十七）の題注に「祠祿將滿、幸麤支朝夕、遂不敢復有請、而作是詩（祠祿官の任期が終わろうとしているが、幸いになんとかやっていけるのもう祠祿を請うことはせず、この詩を作る）」とあり、また冬にも「祠祿滿不敢復請、作口號」

（『劍南詩稿』卷三八）と題する詩があり、この冬に陸游は祠祿官を辞退している。それが結句「今年初解侍祠官」の背景であるが、それを詩では「幸い平素より銭を憎んでいたのに」、渡りに舟であると言わんばかりである。其一の「寛」さを「頑鈍」と言う態度と相通ずるものがあるだろう。

（其四）

初歸誓墓老鄉邦	初めて歸りて墓に誓ひ郷邦に老ゆ
手結茆茨近小江	手づから茆茨を結びて小江に近し
北渚露霑行藥履	北渚 露は霑す 行藥の履
東廂日射勘書窗	東廂 日は射る 勘書の窓
孤忠自信丹心折	孤忠 自ら信す 丹心の折 <small>まが</small> （くじ）折けるに
萬事空成雪鬢霜	萬事 空しく成す 雪鬢の霜
長媿宗人白崖老	長 <small>つね</small> に媿づ 宗人 白崖の老

贈行期我鹿門龐 贈行して我に期す 鹿門の龐

〔自注〕

予自成都召還、禱射洪白崖陸使君祠、使君以杜詩爲籤、予得「全家隱鹿門」之篇。

予 成都自ら召還せられ、射洪白崖陸使君の祠に禱（いの）禱りしとき、使君 杜詩を以て籤と爲すに、予「全家 鹿門に隠る」の篇を得たり。

【拙訳】

帰ってくるや祖先の墓にここに老いゆくを誓い、かやぶきの家が小江のそばに構える。北のみぎわに葉を散じるために歩けばゲタが露でしめり、東の廂に書を校勘すれば窓から日が射し込む。孤獨な忠誠は心のくじけるがままに、全てのことは雪のように白い鬢に霜が降りるのを増やすだけ。いつもかたじけなく思うのは、同族の白崖老が、はなむけ 餞して私に鹿門の龐徳公たれと望んだこと。

押韻は上平四江（邦・江・窗・龐）、下平十陽（霜）。首聯では官を辞して故郷に歸り、「小江」紹興の西に流れる浦陽江のほとりに粗末な家を建てて生活することを詠っている。

第三句の「行藥」は薬を服用した後の散歩を言う。その対に書物の校勘を配した、帰隱生活の実態を写した一聯と言えよう。

第五句には「孤忠」、「丹心」と士大夫としての自意識が示されている。しかしその対になるのは老いを伴った諦感である。

尾聯は自注にあるように、成都から江南に帰る途上、詣でた「射洪白崖陸使君祠」を同姓であることから「宗人白崖老」という。お告げ（籤）となった杜甫の詩は杜甫「遺興五首」（其二、『杜詩詳注』巻七）である。

昔者龐徳公、未曾入州府。襄陽耆舊間、處士節獨苦。豈無濟時策、終竟畏羅罟。

林茂鳥有歸、水深魚知聚。舉家隱鹿門、劉表焉得取。

むかし龐徳公は州府に入ることなく、襄陽の父老たちの中、野に在って節操高く一人心を痛めていた。世を救う策がないわけがないが、網の目が自分を縛ることは耐えられぬ。樹木が茂る林が鳥の帰るところ、水深き流れが魚の集まる場所。家を挙げて鹿門に隠れば、劉表ごときにどうして用いられようか。

これを踏まえて、「鹿門龐」後漢の龐徳公のように出仕せず隠者たれとお告げを受けたことについて、恥じらいを含みつつ白崖老に深く感謝している。全体として官から離れ、隠棲する自分を肯定していると言えよう。

「書触目」と題していても、当然目に映ったものをそのまま書けば詩になるわけではないが、この四首について言えば、前半二首は比較的詩題に沿って目に映ったものを詠んでいるが、後半二首はそこから離れていこうとしている。それでは、連作詩としてこの四首を読み込んでいくと、何が見えてくるだろうか。

三、連作としての分析

其一、其二では、目の前の光景を写し取る「書触目」というタイトルに沿った形で、家の中、机の上をミニチュアの山水と見なし、また絵画が描き取ったものを再び実景として展開している。それは、陸游の生活空間を多分に虚構化しており、実生活が営まれるはずのプライベートな空間は、遊戯性を含んでゆらぎ始める。遊びをもたされてゆらぐ私的空間は、後半（其三、其四）の舞台背景となるのである。

それとは対照的に、後半では一転して等身大の陸游自身が強調されている。其の三では、身体もしくは生活のみすぼらしさが、其四では、郷里での帰隠生活が詠われている。お金などもとから嫌いだといった宣言、またかねてからの念願であったという隠者への志向。赤裸々に告げられるこれらの思いは、いかにも作者である陸游の飾らざる本音が吐露されているようにも見える。仮に後半だけが独立した二首として存在すれば、そのような解釈も可能であろう。だが忘れてはならないのは、この後半の等身大の陸游は、前半に提示された、遊戯の中でゆらぐ私的空間の住人である。自嘲とも自慢ともつかぬ「頑鈍」さで「事に戯れる」陸游は、後半手のひらを返したかのように清貧を誇り、世俗から離れた隠者となることを理想とする。ここには、明かな分裂があるであろう。

ここまで前半と後半の分裂を見てきたが、しかしこの四首は連作として確かに連なり繋がっている。其一から其三までの首聯に見える

「寒」字が、端的にそれを示している。其一では「朝の寒きに怯え」、恐れてはいるもののまだ寒さには直接触れていないと取れる表現である。其二では太陽が昇ってきて時間の経過を表し、「清寒」はぼろのかわごころも貰いてくる。そして其三、寒さはやせつぼちの陸游の「骨に到る」。其四に「寒」字は使われないが、第六句の「雪鬢の霜」は骨に到った寒さによるものであるか。冬に作られた詩であるから寒さを言うのは当然であるが、少しずつ陸游の内部へと接近してくる。「寒」は何かを意図したもののようにも思われる。

前述のように、後半二首においては等身大の陸游が強調されているが、其四では出仕せず隠遁した龐徳公を理想像としながらも、第五句に「孤忠」、「丹心」と士大夫としての自意識がほの見える。隠者になれと告げた白崖老にいつも感謝しているというモノローグは、その前の第五、六句との間にゆらぎを生む。彼の憂国詩に表される強烈な士大夫としての自意識に鑑みれば、このゆらぎは決して小さくはないであろう。

では、其三だけが確固たる宣言なのだろうか。表面上ゆらぎのないものにゆらぎを求めるのは、近づきすぎた、潜りすぎた読みであるのかもしれない。だがこの四首が連作詩として繋がっている以上、其三だけが独立して陸游の本音を表出したものであるとは考えづらいであろう。其四に示されたゆらぎを手がかりにすれば、其三に秘められたゆらぎもやはり陸游の士大夫としての葛藤であろう。祠祿の辞退は、官界との直接のつながりが断たれてしまうことを意味する。換言すれ

ば、それは自らが士大夫であるという外的な証明を手放す行為であった。その動揺こそが、この連作全体をゆるがしているものではないだろうか。

このような読みが許されるのならば、この四首は、それぞれ連作詩の起承転結を一首ずつ担当するパーツの一つとして機能していると言えるだろう。換言すれば、これら一首一首の詩はもはや独立した一篇ではなくなっているのである。一つであるはずの心の内には七つの沢が広がり、独立して一篇たりうるはずの詩歌は連作の部品となる。このような連作の様式は、詩人の心のとりとめのなさを表現するに当たり、実に効果的な働きをしていると言えるのではないだろうか。

四、おわりに

以上、陸游「菴中晨起書触目」四首について、各首それぞれの解釈と、連作としての繋がりに着目した分析を試みた。繰り返すが、「書触目」という詩題に沿っていた前半二首に陸游の遊び、「心にうつりゆくよしなしごと」が巧まざる形で表現されているのに対し、そこから離れていった後半二首では型にはまった士大夫の自意識が表出されている。そして前半二首の「わたし」に近代的自我に近いものを見るならば、この連作の前半と後半の間に、我々にとっての詩(ポエム)と陸游にとっての詩が交錯している、と言ってもいいかもしれない。その交錯をもたらししているのが「書触目」というタイトルとの距離感

にあることを今一度強調しておきたい。^(一七)

また、その遊びから現実には引き戻す役割を、詩に寄り添うテキストである自注が担っている点にも注意すべきであろう。宋詩、とりわけ南宋以降の日常に即した詩歌において、連作というスタイル、自注というテキストはどのように機能していったのか。ここにその一端を示しつつ、今後の課題としたい。

《注》

- (一) 「小憩前平院、戲書觸目」(『劍南詩稿』卷十二)、「弋陽吳江上書觸目」(同卷十三)、「小舟航湖夜歸書觸目」、「野步書觸目」(同卷十五)、「村居書觸目」(同卷十六)、「睡起書觸目」(同卷二十二)、「以事至城南書觸目」(同卷二十三)、「晨起坐南堂書觸目」(同卷二十五)、「晚步門外書觸目」(同卷二十六)、「江村道中書觸目」(同卷二十九)、「郊行夜歸書觸目」(同卷三十一)、「舍北行飯書觸目」二首(同卷三十六)、「菴中晨起書觸目」四首(同卷三十八)、「山園書觸目」(同卷四十七)、「園中書觸目」(同卷四十八)、「立春後十二日命駕至郊外、戲書觸目」(同卷五十二)、「戲書觸目」(同卷六十二)の十七篇。なお、本稿の陸游『劍南詩稿』の引用は錢仲聯校注『劍南詩稿校注』(中国古典文学叢書、上海古籍出版社、一九八五年)に拠る。
- (二) 杜甫「暇日小園散病、將種秋菜、督勒耕牛、兼書觸目」(仇兆鰲注『杜詩詳注』卷十九、中国古典文学基本叢書、中華書局、一九七九年)、王禹偁「携稚子東園刈菜、因書觸目、兼寄均州宋四閣長」(『小畜集』卷三、『四部叢刊』正編影印)。また陳師道に「觸目」(任淵注・冒広生補箋『後山詩注補箋』卷六、中国古典文学基本叢書、中華書局、一九九五年)、「觸目絶句」(同卷十)がある。

(三) 以下、韻目は『広韻』に拠る。

(四) 白居易「新樂府・道州民」(朱金城箋校『白居易集箋校』卷三、中国古典文学叢書、上海古籍出版社、一九八八年)に「道州民、多侏儒、長者不過三尺餘。市作矮奴年進送、號爲道州任士貢(道州の民にはこびとが多く、大きい者でも三尺ほど。市では矮奴として毎年献上し、道州特産の賦税と称している)」とある。

(五) 例えば蘇軾「贈李兕彦威秀才」(王文誥輯注・孔凡礼点校『蘇軾詩集』卷四十三、中国古典文学基本叢書、中華書局、一九八二年)に「如今惟有談天口、雲夢胸中吞八九(今や「世に背を向けて」壮大な弁舌と、雲夢沢を八つも九つも呑み込むほどの度量があるのみ)」とある。

(六) 陸游の「曾是胸中著雲夢、不妨此地少遲留(胸の内には雲夢沢が置けるほどであるから、ここにいささか留まるのも悪くない)」(休日登花將軍廟小樓)、『劍南詩稿』卷四)、「元自胸中著雲夢、莫驚綠鬢耐悲歡(もとより胸の内には雲夢沢が置けるほど、鬢が悲喜交々に耐えて黒いのに驚かないでくれ)」(『醉中夜自村市歸』、『劍南詩稿』卷十六)、「士如天馬龍爲友、雲夢胸中吞八九(士は天馬のように龍を友とし、雲夢沢を胸中に八つも九つも呑みこむ)」(『悲歌行』、『劍南詩稿』卷三十三)などは純粹に広さ、すなわち度量の大きさを言っている例である。

(七) 管見の限り、前者は白居易「酬微之誇鏡湖」(『白居易集箋校』卷二十三)に「一泓鏡水誰能羨、自有胸中萬頃湖(なみなみと水をたたえる鏡湖を誰が羨ましがろうか、私の胸の内には万頃の湖が広がっているのだ)」とあるのが先駆的な例であろう。以降「胸中萬頃湖」(孔平仲「自和喻意四首」其二、『清江三孔集』卷二十五、齊魯書社、二〇〇二年)、「此老胸中萬頃寬」(陸游「園中小飲」、『劍南詩稿』卷二十九)のように用いられる。また後者は蘇軾「書王定国所藏王晋卿画着色山二首」(其一、『蘇軾詩集』卷三十一)に「煩君紙上影、照我胸中山(あ

なたの紙上の輝きでもって、我が胸の内の山を照らす」とあり、また王十朋「次韻趙仲永悠然閣」(梅溪集重刊委員会編・王十朋紀念館修訂『王十朋全集』詩集卷十四、上海古籍出版社、二〇一二年)の「胸中丘壑忽相遇、眼底塵埃無復侵(胸の内の丘や谷に忽ち出会い、目の届く限り塵埃に侵されたところもない)」のように実景と一致する例もある。

(八) 陸游「秋日遣懷」(八首の其二、『劍南詩稿』卷八十三)に「胸中何所有、世界如河沙。區區吞雲夢、何至爲客誇(胸の内に何があるというのか、世界は恒河の砂のごとし。区々たる雲夢を呑むなぞ、どうして客に誇れようか)」とあり、この詩では現実世界の複雑さに対する胸の内の小ささを直截に表現している。

(九) 唐希雅の絵については陸游「唐希雅雪鵲」(『劍南詩稿』卷五十八)を、易元吉の絵については秦觀「觀易元吉獐猿図歌」(徐培均箋注『淮海集箋注』卷二、上海古籍出版社、一九九四年)を参照。

(一〇) 廉布については陸游「梅花」(五首の二、『劍南詩稿』卷四十四)の自注に「廉宣仲自言、以五年之功作竹梢、十年之功作梅枝」とあり、王廉清については「題王仲信画水石横幅」(『劍南詩稿』卷三十八)、「王仲信画水石贊」(『渭南文集』卷二十一)がある。

(一一) 「風漚」は風に吹かれる水面の泡を言う仏教語で、はかない人の世を言う。陸游「戊午元日読書至夜分有感」(二首の其一、『劍南詩稿』卷三十六)に「未收浮世風漚夢、尚了前生蠹簡緣(浮世のうたかたの夢から覚めず、前世の竹簡木簡に虫食う因縁を終えようとする)」とある。

(一二) 『太平広記』卷二百四十八「長孫無忌」に以下のようにある。
唐太宗宴近臣、戲以嘲諷。趙公長孫無忌嘲歐陽詢曰、「聳膊成山字、埋肩不出頭。誰家麟閣上、畫此一獼猴。」詢應曰、「縮頭連背煖、■(衣偏に完)當畏肚寒。只因心溷溷、所以面團團。」帝斂容曰、「歐陽詢、汝豈不畏皇后聞。」趙公、皇后之兄也。(出『國朝雜記』)

唐の太宗が近臣と宴席を設け、あざけり笑いに興じた。趙公の長孫無忌が歐陽詢をあざけって「二の腕が長くて山の字のような体型、肩に埋もれて頭が出ない。どこの麒麟閣に、このサルが描かれようか」と言った。

詢が応戦して「縮こまった頭は背中と連なつて暖かいが、よだれかけでは腹が寒かろう。内面が濁っているばかりに、外見があんなに丸々と太っているのだ」と言うと、太宗は表情を硬くして「欧陽詢よ、皇后の耳に入るぞ」と言った。趙公は皇后の兄にあたる。

(一三) 『漢書』王莽伝。なお「巨毋霸」とは「巨君(王莽の字)は覇を唱えることはできない」の意で、「博意欲以風莽(韓博は王莽に皮肉を言ううとしたのだ)」とある。

(一四) 晏嬰については、『史記』管晏列伝に「晏子長不滿六尺」とある。杜生については、錢仲聯は、隱者との関連から五代の道士杜光庭かとしている。

(一五) 査慎行の注が引く「与張文潛尺牘」(佚文か)に「屏居荒服、無一物爲信、有桄榔方杖一枚、前此土人不知以此爲杖也(辺境に隠居して、頼れるものはないが、一本の桄榔の杖は、以前この土人たちが杖に使えると知らなかったものだ)」とある。桄榔はヤシ科の植物、和名くろくづ。

(一六) 『唐摭言』卷十五に「朝旭上團團、照見先生盤。盤中何所有、苜蓿長闌干。飯澁匙難縮、羹稀筋易寬。無以謀朝夕、何由保歲寒(真ん丸の朝日が上り、先生の盤を照らす。盤には何が入っているか、いつも盛られたうまごやし。飯は固くて匙ですくいくく、スープは具無しで箸が泳ぎやすい。一日どうしのぐかもおぼつかないのに、どうやって冬を越したのか)」とある。

(一七) しかし、管見の限り、陸游のその他の「目に触るるを書す」と題する詩にこうした交錯は見られず、そこに描かれるのは概して閑適の境地に自足する陸游の姿である。